

# 一心寺かわら版

第五十九号 令和五年九月発行

持名山一心寺 検索

## 本山興正寺慶讃法要報告



本山興正寺にて、四月十八日から二十日にかけて、慶讃法要（親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年・御影堂等復旧報告・嗣法就任式）が勤まりました。親鸞聖人が生まれたのは今から八百五十年前の一七三三年（承安三年）。主著『顕浄土真実教行証文類』（教行信証）が著された一二二四年（元仁元年）を浄土真宗が開かれた立教開宗と定めています。

真宗興正派華園真暢ご門主ご親教「思い返せば、平成三十年は、興正寺にとって苦難の一年でありました。六月十八日に発生した大阪府北部地震、二か月後に上陸した二つの大型台風は、御影堂や阿弥陀堂をはじめとする、山内多くの建造物に、甚大な被害をもたらしました。自然の威力の前に、私たちが人間が、いかに微力であったか

を改めて思い知らされます。この未曾有の災害を、派内一丸となって乗り越えていくため、すぐさま復旧の歩みが始まりました。僧侶や門徒の皆さまをはじめ、有縁の方々の愛山護法のご懇念と、工事関係者の献身的な努力に支えられ、四年の歳月をもって、令和四年十月、すべての山内復旧工事は終了いたしました。往時の相を取り戻したこの山内において、ここに慶讃法要をお迎えすることができましたことは、ひとえに仏祖ご照覧のもと、ご尽力いただいた多くの皆さまのお陰であると、心より御礼申し上げます。

さて、親鸞聖人は、いまを去ること八百五十年、承安三年四月、戦乱と激動の世に、京都日野の里で御誕生されました。九歳で出家得度され、二十年にもおよぶ比叡山での修行の後、二十九歳の時、法然上人との出会いによって、阿弥陀仏のご本願に帰し、念仏の道を歩まれました。元仁元年、聖人五十二歳の時には、常陸国稲田において、浄土真宗の根本聖典である『顕浄土真実教行証文類』（教行信証）六巻を著し、すべての人





が齊しく救われる「本願を信じ、念仏申さば仏となる」道を説き示してくださいました。聖人御出世のご恩がなければ、また立教開宗のお導きがなければ、「煩惱具足のわれら」が、どうして本願念仏のみ教えに出会うことができたでしょうか。

「ああ弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」

聖人は苦難の人生の中で阿弥陀さまの喚び声であるお念仏を聞信し、喜び、そのお心をお伝えくださいました。お念仏のみ教えは、人と人が寄り添い、ふれあう中で育まれ、多くの先人に受け継がれて、私のところにいま届けられています。届けられたお念仏を聞信し、喜び、伝えていくところにこそ、私の浄土真宗の歩みがあるのです。私たち真宗門徒にとって、この本堂は、聖人がお示しくださった、阿弥陀さまのお心を聞信していく聞法道場に他なりません。

「遇い難くしていま遇うことをえたり」

この度の慶讃法要のご縁を大切にしていたさながら、「いまこそお念



仏」と、こころ新たに、皆さまお一人一人のお念仏のみ声が、有縁の方々へ子や孫へと、受け継がれ、育まれて行くことを深く願ってやみません。」

十九日朝座には次期門主・華園真慶嗣法の就任式がありました。

「皆さまに支えられ、こうして就任式を迎えることができました。改めて嗣法の責務を感じております」と感謝を述べ、「親鸞聖人が明らかにしてくださいました阿弥陀様のご本願を聞きひらき、一人でも多くの方々と共にお念仏の道を歩んでいきたい」と思いを語られました。昼座では初めて壇（導師）、清々しくも凜としたその姿に一同感服しました。

一心寺からは八名の方が参拝。日帰りのため十分な時間が取れませんでした。みなさま本山の荘厳な雰囲気を感じていただけたことと思います。

また、二十日には御堂法話を担当しました。満堂の参拝者と「今こそお念仏―つなごうふれあいの輪」を共有することができ、大変有難いご縁でした。一心寺YouTubeチャンネル（下記QR）で配信していますので、ご覧いただければ幸いです。





## 花まつり報告

観音寺市仏教会主催の花まつり、一心寺で行われるのは二十数年ぶり。四月八日、二十二名の僧侶が集い、仏教の開祖であるお釈迦さまの誕生をお祝いしました。

お釈迦さまがお生まれになられたのがルンビニの花園であったということから、仏教会花まつりではアヤメの花をお供えています。そして、誕生の際に甘露が注いだという故事になみ、誕生仏（生まれたばかりのお釈迦さまの像）に甘茶をかけます。

宗派を超えて僧侶が集い、お勤めされる仏事は希有なこと、有難いご縁でした。

同時にミニ縁日も開催。多くの子どもたちが、ヨーヨー釣りやスーパーボールすくい、的当てなどを楽しんで満面の笑み。また、誕生仏に甘茶をかけて手を合わせ微笑ましい姿。子どもたちが仏さまに護られて、すくすくと育つことを願い、花まつりを終えました。



## 春季永代経報告

三月十七日、三年ぶりに平常通りの法要を勤めることができました。法話は林和英氏（まんのう町・長光寺）。「好きな人のために、その人を守るように、それは仏さまの心。そのような仏心と同じようになりたいと願う。させられることはどんな小さなことでもしんどい。好きなことはどれだけ努力してもしんどくない。阿弥陀さまの心、本願力をいただければ、どんな時も一人ではなく、好きな人と一緒に精一杯生きていくことができる」と聞かせていただきました。



お寺の掲示板法話「終活することとあなたの成仏とは無縁です」

近年始まった終活ブーム。私たち僧侶もそれに関する知識が必要という事で研修を行っています。人生も終盤に差し掛かると、病気になる、体が不自由になる。病院にかかり、介護が必要になる。次に、私が死んだ後、葬儀、遺骨をどうするか。次に、私が残したものの、財産をどうするか。終活とは、一つには医療、介護、二つには葬儀、墓などの仏事、三つには相続、四つには遺品に関する事だそうす。

終活は何のためにするのでしょうか。これを残しておく、子供に、周りの方に負担がかかる。できる限り迷惑をかけないように、体が不自由になる前に、死んでしまう前に決めておこうとしているのでしよう。



昨年亡くなられた仏教学者のひろさちやさんは「ぼっくり死にたい。ボケたらみんなに迷惑をかけてしまう」と言う母親に対して、「あなたは生きてる限り迷惑だ」と言い放ちました。ずいぶんひどいことを言っているようですが、「うちの母親だけでなく、すべての人間はみな生きてる限り、周りに迷惑をかくまくっている存在なんです。どんな人間でも迷惑をかけることは当たり前前、それを無視して死んだ後のことをすべて自分で決めようとする終活にはエゴがつきまっています」とおっしゃっています。

仏教は縁起、全ての出来事は縁によって起こると説きます。誰も一人では生きていない、迷惑をかけずには生きられないというのが道理です。

さて、終活して子供への負担を減らすことができたとしても、今を、死を迎えるにあたって、喜びをもって安心して生き切ることができのでしょうか。終活も大事ですが、それに終始するのではなく、私のいのちの真実、いのちの行き先を見定めていくことが本当の終活ではないかと思えます。それを仏教に聞いていきましょう。

よるしるべ&よるしらべのご案内

今年も観音寺よるの街歩き「よるしるべ」が十一月十一日(土)、十二日(日)の十八時〜二十一時に開催。普段とは違う夜の街、一心寺の境内の雰囲気をお楽しみください。

声明雅楽コンサート「よるしらべ」も八回目。親鸞聖人ご誕生八百五十年を記念して、普段では聴くことがない声明と雅楽を披露する予定です。是非、ご来場ください。

お知らせ

毎年みなさまのお宅にお参りしている報恩講。例年十月中旬〜翌年一月でしたが、本年より十月一日から順次お参りさせていただきます。これまでと時期が変わることもありますが、ご理解のほどよろしく願っています。

誕生報告

七月二十七日、第四子、女の子が誕生しました。二七九グラムの元気な赤ちゃんです。一心寺の一員として、どうぞよろしく願っています。

